

(令四前)

国

語

(問題部分1～14ページ)

注意

- ① 解答はすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。
- ② 海洋政策科学部の受験者は、一(1～8ページ)に解答し、二と三(9～14ページ)には解答しないこと。
- ③ 経営学部の受験者は、一と二(1～11ページ)に解答し、三(12～14ページ)には解答しないこと。

国語 (海洋政策科学部) 八〇点

国語 (経営学部) 一二〇点

国語 (右の二学部以外) 一五〇点

— 次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい。(配点八〇点)

しばらく前のことになるが、『日本語が亡びるとき』という本が話題をよんだことがある。その副題に「英語の世紀の中で」とあるように、この本は「グローバル化」して行く世界のなかで、日本語に生き残る余地はあるかという問いを提起したものである。著者の水村美苗は小説家であり、それゆえ、そこでの考察の中心は、日本語で書かれた文学作品の運命ということにある。日本語で書かれている限り、そうした作品の読者は国際的には少数にとどまり、世界の文学全体のなかではたして意義をもちうるだろうかというのが、著者の心配である。

こうした心配に根拠がないわけではないことは、自然科学における状況を見るだけでよくわかる。いまや自然科学のほぼすべての分野において、新しい研究は英語で発表されなければ、発表されなかったと同じことになってしまう。この傾向は自然科学にとどまらず、社会科学や人文科学の分野においても、同様の「英語の支配」は進みつつある。

こうした事態は、日本の近代文学が^(a)辿った道に照らすとき、きわめて皮肉なものとなる。日本の近代文学の開拓者たちは、西洋の影響を受けて急速に^(a)ヘンポウして行く社会が生み出す新しい主題に取り組むだけでなく、そうした主題に適した日本語を作り出す必要があった。同じことは自然科学についても言える。西洋の科学が日本に根付き始めたのは、近代文学の成立とちょうど同じ時期のことであるが、科学に携わった日本人が最初にしなければならなかったのは、大量の専門用語を始めとする科学のための言語を作り出すことであった。

しかしながら、一九世紀後半において、自然科学はすでに国際的な営みとなっていたのに対して、ルネサンス以後の西洋において、文学とは、特定の国民文化の一部であり、その国民の言語と結び付いたものとみなされていた。一九世紀末にそうした文学の観念に初めて触れた日本人が、日本語で書かれた国民文学を作り出そうと考えたことに不思議はない。問題は、当時の日本人が扱おうとしていた主題を表現できるような日本語がまだ存在しなかったことである。多くの試行錯誤の末、こうした日本語が作り出され、比較的自在に使うことのできる文学言語を所有するまでになった。

ごく最近まで、日本の近代文学は、きわめて閉ざされた世界を形作っていて、作家も読者もこの状況に満足していたように思われる。だが、グローバル化の進行と、日本国内での読者の減少は、日本語でこれから書かれる作品にどれだけの将来性があるかを危惧させるまでになっている。文学に関係する人々のあいだで、水村の本が大きな反響を呼んだ原因のひとつは、ここにある。

明治のはじまりの頃に、当時の西洋の小説や戯曲を知るようになった若者たちは、それが自分たちが親しんできた江戸時代の物語やシバイとまったく異なることを痛感したに違いない。同様に、同時代の西洋の哲学に触れる機会のあった日本人は、そこに、儒教や仏教のとはまったく異なる新しい観念の世界が広がっていることに気付いただろう。

西洋の哲学が日本の近代社会に足場をもつようになるには、文学の場合とは比べものにならないほどの困難があった。西洋の哲学は日本の社会に、結局根付かなかつたと言うひとまでいるかもしれない。西洋の哲学が近代日本で経験したこうした困難にはいくつかの理由があるが、哲学のための十分な言語を作り出すことのむずかしさが、そのひとつであったことは疑いない。

哲学は、ある程度一般的で抽象的な概念を必要とする。西洋哲学がもたらされるまで日本語にそうした概念を表す言葉がなかったわけではない。儒教および仏教の伝統には、そうした言葉と概念が存在した。これは主として、漢字の組み合わせによって表される、中国から渡ってきた言葉と概念であり、それゆえ、普通の人々の話す日常の言葉とは区別される特殊な語彙を形作っていた。明治維新の直前に西洋の哲学が日本に入ってきたとき、儒教や仏教の伝統に属する語彙とは別の、しかし、同様に特殊な語彙が、ごく短期間のあいだに作られた。しかも、その際、儒教や仏教に由来する語が転用されることもしばしば生じた。哲学のための新しい用語をもつことで、われわれは自身の言語で、西洋に由来する哲学的問題や主張を議論できるようになった。たとえば、決定論と自由の問題や、カントの哲学について、ヨーロッパの言葉を通じてではなく、日本語で論じられるようになった。このことによる恩恵は過小評価されるべきではない。しかしながら、近代の先人たちから受け継いだ、こうした哲学の言葉は、多くの弊害ももたらした。

最大の問題は、こうした哲学用語が、日本語の一部として確立してから出てきた。まがりなりにも日本語の一部となったということは、ひとが、その正確な意味に思いわずらわなくとも使うことができるということである。実際、ひとは自分の用いている言葉の意味を正確に理解して用いているのではない。自身の言語の一部であるという理由だけで、言葉にはその意味がついてくるとひとは考える。哲学用語についても同じである。それゆえ、ひとは、正確な意味どころか、バクゼン^(c)とした意味の了解も伴わずに、哲学用語を使うようになる。その結果は、理解の錯覚の蔓延^{まんえん}である。しかも、こうした錯覚にもっとも陥りがちなのは、哲学を「専門とする」教師や学生である。

この錯覚は、たとえば次のような仕方で生じる。カントを真剣に研究したいという学生ならば、カントのテキストをもとのドイツ語で読むだろう。しかし、よほどドイツ語に堪能でない限り、カントの文章の理解には日本語の助けが必要になる。それはいったん日本語に「翻訳」されて理解されることになる。カントが用いているドイツ語の言葉が、その訳語とされる日本語の言葉で置き換えられることによつて、カントが言っていることを理解したような錯覚が容易に生まれる。こうした置き換えによつて生じた文は日本語の文のようにみえる。しかし、実際のところそれは、ドイツ語のいくつかの語を、日本語の「てにをは」で結び付けたものにすぎない。こうした文を生み出したひとが、その意味を説明できないことに何の不思議もない。

現在から振り返るならば、日本で哲学言語がいちおうの成熟をみたのは一九六〇年代のことだったと言える。それは、日本人が西洋哲学を取り入れ始めてから百年後のことである。この時期、日本の哲学者の大多数はまだ、以前通りの仕方ですべて語ったり、書いたりしていたが、何人かの哲学者は、これまでとは異なるやり方で、哲学用語に向き合おうとし出していた。

先に述べたように、哲学用語の大部分はヨーロッパの言葉の訳語として始まった。もとの言葉を知っている者にとっては、自分がこうした訳語を、その原語と同じ意味で用いていると信じるのはたやすいことだった。こうした者は、日本語の哲学用語の意味を定義したり特徴づけたりする必要を感じなかっただろう。なぜならば、もとのヨーロッパの言葉を示すことで足りると考えたからである。しかし、もとの言葉が何を意味するのは、ごくぼんやりとしかわかっていないということは、十分にありう

る。その場合当然、日本語の哲学用語の意味についても、ぼんやりとした把握しかもたないことになる。その結果頻繁に起こることは、ひとが、哲学的主題について流暢りゅうちやうに語ったり書いたりするにもかかわらず、自分が何について語り書いているのかわかっていないということである。これは、個人のなかだけではなく、複数のひとのあいだでも生じうる。一見カンペキに理解しあっている人々のあいだで哲学の議論がスムーズに進行しているとみえながら、実際のところ生じているのは、何の理解も伴わない言葉のやり取りだけといった事態である。

こうした状況に対抗して、自分の責任で哲学用語を使おうとする若い世代の哲学者が出てきた。こうした哲学者たちは、自分が哲学の言葉をどのように使うつもりかを、翻訳語のもとになった西洋の言葉に訴えることなく、意識的に特徴づけようと努めた。それと同時に、日常の言葉からそれほどかけ離れていない言葉で哲学の議論を行おうとした。こうすることで、西田幾多郎を中心とする京都学派に代表されるような秘教的な哲学のスタイルを追放しようとした。

哲学では抽象的な概念を表す表現を使わないで済ますことはできないが、若い世代のこうした哲学者たちは、具体的な例を通じてそうした表現に説明を与えようとした。同様に重要なのは、仏教や儒教の用語を借りて西洋の抽象名詞の訳語として作られた日本語の抽象名詞を使わずに、自分が何を言いたいのかを表現することである。抽象名詞の使用を避ける良い方法は、議論の主題と関係する領域に関して使われる動詞や形容詞に注目することである。たとえば、日本語の「現象」は、「phenomenon」や「phenomena」に対応すると考えられるが、この名詞を扱うよりは、英語の「appear」や「occur」に対応するような日本語の動詞は何だろうかと考える方が、ずっと有益だろう。

これはちゃんとした研究が必要だが、一九六〇年代に書かれた日本語の哲学の文章を眺めるならば、相変わらず、もっぱら漢字で表された抽象名詞でページが黒くみえるようなものに混じって、それほど漢字で埋め尽くされていないために白っぽくみえるものがあることに気付く。こうした文体の変化の背景にあるのは、哲学用語に対する態度の変化であり、さらに、その底には、哲学観の変化がある。

前の世代から受け継いだ哲学言語を、日本の哲学者が意識的に作り直そうとし始めてから、だいたい半世紀経った。哲学の一部には、難解さが深遠さのしるしだとみなされるような場所がまだ存在するとはいえ、一般に、哲学にかかわる人々のあいだで、表現が明瞭であることは、すぐれた哲学の文章であるために必要だと認められている。そして、現在われわれは、自分たちの用途に十分であるような哲学の言語を所有している。

こうした展開が生じたのが、哲学の国際化と国際共通語としての英語の独占的優位の確立と、ほぼ時期を同じくしたということとは、大きな皮肉である。

最近生じた哲学の国際化は、哲学がより広範囲の地域のより多くの人々にとって重要となったから生じたということでは決してない。哲学がよりポピュラーになったというのではなく、その反対に、哲学が高度に専門化したことがむしろ哲学の国際化を推進してきたのである。哲学、少なくともアカデミックな哲学は、現在、多くの専門分野に分かれ、それぞれの分野の専門家のためになされている。

こうした専門化は、その必要性が容易に予想できる分野、たとえば、物理学の哲学、生物学の哲学、数学の哲学、あるいは、哲学史の諸分野だけにとどまるものではない。存在論、認識論、倫理学といった、哲学の中核的分野までが、専門家のものになっている。こうした分野のどれについても、その分野の研究者になりたいと思う者は、専門用語に満ち、しばしばテクニカルでもある、ポウダイ^(e)な先行研究をマスターしなければならない。

哲学における専門化は、専門家どうしの国際的な意見交換のための共通言語として英語を採用することを伴っている。これは、自然科学の多くの分野で生じたのと同じことである。いまや哲学においてさえ、哲学の特定の主題に関して独創的な貢献をしたいと思うならば、英語で発表しなければならないという状況になっている。

現在見られるような専門化にまったく何の利点もないわけではない。哲学の問題のなかには、その解決のために、それに専念する人々からの集中的な努力を必要とするものもある。そして、それは、科学哲学や哲学的論理学といった専門的な分野だけとは限らない。

しかしながら、そうした問題が哲学のすべてではない。哲学はいつも専門家だけのものであつたわけではない。ある重要な意味で、それは、すべての人のためのものである。哲学のなかのもっとも重要な問題は同時に、何世紀にもわたつて満足な解決を見出せないでいる、もっともむずかしい問題でもあるが、それは、世界のなかでの自分の位置について考えようとするひとならば必ず関心をもつような問題でもある。

何かを選択したり、行うとき、われわれは自由にそうしているのか。

時間は実在するか。

すべてがそのうちになくなるのならば、人生に意味はあるのか。

こうした問いは、哲学の教育を何ら受けていない人であっても、ときには気になる問いである。論理実証主義者がかつてそうしたように、これを擬似問題として退けることはできない。こうした問いの背景に何らかの誤解や見落としがあつたとしても、そうした誤解や見落としを指摘するだけでは、問いを追い払うことはできない。こうした問いに真剣に取り組み、それがどんな内容を持ち、誰をも満足させるような答えを与えるのがむずかしいのはなぜかを、普通の人にわかるような平易な言葉で説明するのは、哲学者の仕事である。

現在の日本には、哲学を専門とする教師や学生といった範囲を超えた広い読者をもつ何人かの哲学者がいる。かれらの書くものは、哲学の何らかの分野の専門家に向けられたものではない。それは、現在の日本の文学のなかで、小さくはあるが、決して無視できない部分を占めている。日本の文学の将来についての水村の憂いが、もしも正しければ、こうした哲学の文章もまた、日本語で書かれた文学一般と同じ運命をたどることになろう。そうすると、⁽⁴⁾またしても皮肉なことに、一般の読者のための優れた哲学書を生み出せるほどに日本の哲学言語が成熟したまさにそのときに、この言語に未来はないということになる。

だが、本当だろうか。将来においては、専門家のためであれ、一般の読者のためであれ、哲学はすべて英語でなされるように

なるのだろうか。

(飯田隆『分析哲学　これからとこれまで』より、一部省略)

〔注〕 ○カント——ドイツの哲学者(一七二四～一八〇四)。

○西田幾多郎——日本の哲学者(一八七〇～一九四五)。独自の哲学体系を築き上げ、京都学派を創始した。

○論理実証主義——観察などにより真偽を検証できない哲学的な主張は無意味だとする哲学上の考え方。

問一 傍線部(ア)「哲学のための十分な言語を作り出すことのむずかしさ」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部(イ)「こうした文を生み出したひとが、その意味を説明できない」とあるが、それはなぜか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(ウ)「その底には、哲学観の変化がある」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(エ)「またしても皮肉なことに、一般の読者のための優れた哲学書を生み出せるほどに日本の哲学言語が成熟したまさにそのときに、この言語に未来はないということになる」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。はつきりと、くずさないで書くこと。

二 次の文章を読んで、問一〜六に答えなさい。(配点四〇点)

昔、おほやけおぼして使うたまふ女の、色ゆるされたるありけり。大御息所おほみやすんじせうとていますかりけるとこなりけり。殿上にさぶらひける **a** なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女がた許されたりければ、女のある所に来て向かひをりければ、女、「いとかたはなり。身もほろび **b** ^①ん。かくなせぞ」と言ひければ、

思ふには忍ぶることぞ負け **c** ける逢ふあにしかへばさもあらばあれ

と言ひて、曹司さうしに下りたまへれば、例のこの御曹司には、人の見るをも知らでのぼりあければ、この女、思ひわびて里へ行く。されば、何のよきことと思ひて、いき通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめて主殿寮とのもつかさの見るに、杳くつはとりて、奥に投げ入れのぼりぬ。かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになり **d** べければ、つひにほろび **d** べしとて、この男、「いかにせん。わがかかる心やめたまへ」と仏神にも申しけれど、いやまきりにのおおほえつつ、なほわりなく恋しうのみおほえければ、陰陽師おんやうじ、巫かむなよびて、恋せじといふ祓はらの具してなむ行きける。祓へけるままに、いとどかなしきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおほえければ、

恋せじと御手洗河みたらしがはにせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな **A**

と言ひてなむいにける。

この帝は顔かたちよくおはしまして、^② 仏の御名を御心にいれて、御声はいとたふとくて申したまふを聞いて、女はいたう泣き **B** けり。「かかる君に仕うまつらで、宿世すくせつたなくなしきこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに、帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかださせて、蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。

海人あまの刈る藻にすむ虫の我からと音をこそなかめ世をばうらみじ

と泣きをれば、この男、人の国より夜ことに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞあはれに歌ひける。かかれ

ば、この女は蔵にこもりながら、^③それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。男は、女し逢はねば、かくし歩きつつ、人の国に歩いてかく歌ふ。

^(C)いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

水尾^{みづのを}の御時なるべし。大御息所も染殿^{きさね}の后なり。五条の后とも。

(『伊勢物語』より)

〔注〕 ○色ゆるされたる —— 身分が高く、特別な色の衣装の着用を許されていること。

○大御息所 —— 清和天皇の母である藤原明子。

○女がた許されたりければ —— 女官の控えるところに、出入りを許されていたこと。

○かたは —— 見苦しいこと。よくないこと。

○曹司 —— 宮中にある女官の居室。

○主殿寮 —— 宮中の調度の管理や整備を担当した役所。ここではそこに所属する役人のこと。

○この帝 —— 清和天皇のこと。後出の「水尾」も同じ。

○しをる —— 折檻^{せつかん}する。こらしめる。

問一 傍線部①～③をわかりやすく現代語訳しなさい。

問二 傍線部(A)「神はうけずもなりにけるかな」にはどのような心情が込められているか、五〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(B)「泣きけり」について、その理由を四〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(C)の和歌の大意を述べなさい。

問五 空欄 a には、『伊勢物語』の主人公とされる人物の名字が入る。適切な漢字二文字を書きなさい。

問六 空欄 b～d には、助動詞「ぬ」が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えなさい。二箇所ある空欄 d には、それぞれ同じものが入る。

三 次の文章は、獄中で死に瀕している左光門と、彼を救いに来た弟子の史可法との間で交わされたやり取りを描いたものである。これを読んで、問一〜四に答えなさい。なお、設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある。（配点三〇点）

聞^ケ下^バ左公被^ラ二炮烙^ハ、旦夕^①且^シ死^ス、持^シ三五十金^ヲ、涕泣^シ謀^ル二於禁卒^ニ、卒感^ス焉^②。
 一日使^シ下^メ史^ヲ更^ニ敝衣^ニ、草履^ニ背^レ筐^ヲ、手^中長^ク鑊^上、為^ス二除不潔者^ト。引^キ入^レ、微^カ指^シ二左公^ヲ、則^チ席^{ヨリ}地^ニ倚^リ牆^ニ而坐^シ、面額焦爛^シ不^レ可^ク弁^ズ。左膝以下、筋骨尽^ク脱^セ矣。史^ハ前^ニ跪^キ抱^キ二公膝^ヲ而鳴咽^ス。公弁^ズ二其声^ヲ而目^ハ不^レ可^ク開^ク、乃奮^ヒレ臂^ヲ以^テ指^シ撥^レ、皆^ハ目光如^ク炬^ノ、怒^リ曰^ク、「庸奴^③、此何地也^④、而汝^ハ来^リ前^ニ、国^⑤家之事、糜爛^シ至^ル此^ニ。老父^⑥已^ニ矣、汝復^タ輕^シ身^ヲ而昧^ク二大義^ニ、天下事^⑦誰^カ可^キ支^ス拄^ス者^⑧。不^レ速^ク去^ラ、無^クレ^ハ俟^マ二姦人^ノ構陷^ス、吾今即^チ撲^キ二殺^{セント}汝^ヲ。」因^リ摸^リ二地上刑械^ヲ、作^ス二投擊^ノ勢^ヲ。史噤^ミ不^レ敢^テ発^ス声^ヲ、趨^リ而出^ツ。後常流涕^シ述^ベ二其事^ヲ、以^テ語^リ人^ニ曰^ク、「吾師肺肝^⑨、皆鉄石所^ニ鑄造^ス也。」^⑩

（方苞『望溪集』より）

〔注〕

○左公——左光門（一五七五〜一六二五）。明朝末期の腐敗した政情を批判し、逮捕され、獄死した。

○炮烙——火を用いた拷問。

○旦夕——すぐにでも。

○禁卒——ろうやの番人。

○史——史可法（一六〇一〜一六四五）。左光門の忠義の精神に感化を受け、明朝滅亡後、その再興を図るも果たさず、清軍に殺された。

○敝衣——だぶだぶの粗末な衣服。

○筐——竹製のかご。

○長鎌——土を掘る道具。

○除不潔者——清掃人夫のこと。

○庸奴——愚か者。史可法を叱ったのである。

○糜爛——腐敗の極みに達する。

○支柱——土台を支えること。

○構陷——人を無実の罪に陥れる。

○刑械——刑罰の道具。

問一 傍線部①「且死」、②「已矣」をすべて平仮名で書き下しなさい。（現代仮名遣いでよい。）

問二 傍線部(a)「卒感焉」、(b)「此何地也」を、それぞれ「焉」と「此」が指すものを明らかにして、平易な現代語に訳しなさい。

問三 傍線部(c)「天下事、誰可支柱者」とあるが、なぜそう言えるのか。左光門の発言をふまえながら五〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(d)「吾師肺肝、皆鉄石所鑄造也」とは、どういうことか。本文に即して五〇字以内で説明しなさい。